

# 政治を問いかける市民と芸術

## —台湾ヒマワリ学生運動から見たもの—

石原 遥

(東京大学大学院総合文化研究科)

### 要約

民主主義の原則は“*rule by the people*”であり、本来主権とは国民に帰属するものである。我々は選挙によって選ばれた代表者に政治を託すけれども、果たして選挙への参加だけが市民の政治参画なのだろうか。過去に起こったナチズムの歴史を教訓にすると、独裁者の支配を許さず、本来の主権者たる国民が政治に関心を持ち、積極的に目を向けていくことの重要性は明らかである。平和な状態を形成し維持するため民主主義は意義を持ちうるが、同時に民主主義の特性を活かすためには選挙への参加はもちろん、市民が政治に関心を持ち続けることが必要である。本稿では、台湾のヒマワリ学生運動で見られた主張が、どのようにして公共の場で立ち現われていたのかを大衆による創作物(=芸術作品)との関わりから考察を試みる。創作物が政治に対する「問い」を喚起させることで、人々の政治に対する思考力や関心を引きだし、政治に参加させていく姿が見出せるのではないだろうか。

### はじめに

「民主主義<sup>1</sup>」という言葉が、今では至るところで登場する。人民による自己統治を原則に据えた民主政治が守られるべき重要な仕組みであることは多くの人が認めるところであろう。しかし一方で、筆者のように戦後どころか冷戦後に生まれた日本の若者の多くにとっては、民主主義を重要だと認識していたとしても「民主主義ではない状態」とはイメージすることでしか掴めない現実味のない存在として映るのではないだろうか。現代の日本において民主主義体制とは当然の状態であり、権威主義体制や全体主義体制はもっぱら過去の話か遠い他国の話として感じられる。少なくともそのような感覚でいた筆者にとって、「民主主義を守れ(捍衛民主)」と声高に叫び、政権に対して抗議運動を展開した台湾の太陽花学運(ヒマワリ学生運動)は衝撃的な出来事であった。なぜなら民主主義体制とは一度築けば永続されるものではなく、国民の政治参画という努力が不可欠であり、それこそが土台となる体制であること、また少し間違えればいつでもそれは崩れ去ってしまう危険性があることに改めて気づかされたからである。その意味で民主主義とは非民主的な国家でのみ問題になり得るわけではなく、現状において民主的な体制を敷いている国家であっても(すなわち全ての国家で)常に問われ続けるべき関心事といえる。

---

<sup>1</sup> 本論で登場する「民主主義」とは、「あらゆる主義の原理は本質的に国民に存する(佐々木 2007:45)」状態である国民主権を念頭において用いる。

2014年3月18日に始まった台湾での立法院(国会)の議場占拠は、不十分な審議で協議をやり通そうとする政治プロセスに対して遺憾を表明した学生の働きかけによって大きな運動へと発展した。この運動の展開には SNS の活用や国際社会への発信といった運動そのものの拡がりにユニークな部分を見出せるが、他方、4月1日より現場を訪れた筆者にとっては民主主義の土台とも言える市民の政治参画の姿勢の強さが印象的であった。なかでも表現や表象する術としての芸術の特性が「人々」の声を聴き出す可能性を持ち、さらには人々の連帯を促す役割を果たしていた点からは、芸術が持ち得る社会へ働きかける力を見出せるのではないだろうか。本稿では、ヒマワリ学生運動で見られた主張が、どのようにして公共の場で立ち現われていたのかを大衆による創作物との関わりから考察してみたい。創作物が果たしている市民の政治参画への影響をたどることで、芸術の持つ平和に対する働きかけを検討することが狙いである。

## 1. 平和を条件づけるもの

まず始めに、このような台湾の学生運動の展開がなぜ平和の問題と関わるのかについて考える必要があるだろう。それに関してヨハン・ガルトゥングによる平和の概念を用いて整理してみたい。ガルトゥングは平和な状態とは暴力の不在であるとして、暴力の持つ構造を吟味することで平和の概念を拡大させた。ガルトゥングは暴力の定義を「実現可能であったものと現実に生じた結果とのあいだのギャップを生じさせた原因<sup>2)</sup>」として物理的暴力と構造的暴力とに二分することで、それぞれの暴力の不在状態を消極的平和・積極的平和とした。これにより平和を捉えるキーワードには、必ずしも非戦や非暴力だけで留まらず、寛容、人権、民主主義、環境保全などの幅広い視点がもたらされた。構造的暴力の不在である積極的平和は社会的公正とも言い換えることができるが、ガルトゥングは「権力と資源の平等主義的配分<sup>3)</sup>」状態であるとも指摘している。つまりこれに則れば、当然、権威主義体制や全体主義体制も権力の集中状態であるため平和な状態ではないと言える。そのため国民に主権が置かれ、選挙権や発言権といった政治参画の手段を持ち得る民主主義体制は、積極的平和の状態を保つための重要な要素であると考えられる。つまり民主主義の危機を叫んで発展していった台湾の学生運動は、平和の要素となる民主主義を問題にしている点で平和とも関わってくると言える。では、台湾の学生運動では何が問われていたのだろうか。

## 2. ヒマワリ学生運動とは

台湾では2014年3月18日、前代未聞の議場占拠が起こった。馬政権が2013年に中国と署名した「中台サービス貿易協定(两岸服務貿易協定)」の審議過程が打ち切りされたことに異議を唱える学生グループによるものだった<sup>4)</sup>。この動きの支持者は台湾各地にまで及び、学生

---

<sup>2)</sup> ガルトゥング(1991:6)

<sup>3)</sup> ガルトゥング(1991:44)

<sup>4)</sup> 中台サービス貿易協定は、中台間の FTA(自由貿易協定)に相当する ECFA(两岸經濟協力枠組協定)における合意事項の一環で、双方のサービス貿易の自由化促進を謳い 2013年6月21日に調印された。中国は台湾に対して 80 項目、台湾は中国に対し 64 項目の市場を開放しており「台湾に有利」であ

は4月10日までの24日間にわたって議場占拠を続けた。この運動はヒマワリの花がシンボルとなったことから「太陽花学運(ヒマワリ学生運動)」と呼ばれる<sup>5</sup>。この間、台湾国内はもとよりSNSを活用することで世界各地の台湾人(留学生や社会人など)コミュニティにまで運動の熱は波及した<sup>6</sup>。運動のスローガンは「拒絶服貿、捍衛民主(サービス貿易協定を拒絶、民主を守り抜け)」、「退服貿、重啟談判(協定を撤回し、協議をやり直せ)」だが、「学生らの当初の訴求は協定撤回ではなく、審議打ち切りに対する抗議<sup>8</sup>」であり、中台サービス貿易協定自体に対する是非の意見がどうであるかは別にして中台サービス貿易協定の撤回と再協議の要求が運動の根底に存在する。日本では「反中」や「中台統一に懸念」といった文脈から協定自体への反対主張(「反服貿」)だとする報道が目立ったが<sup>9</sup>、学生の実際の批判と訴求は馬英九・国民党政権に向けられていた(本田 2014)。なぜなら与党である中国国民党が協定の審議を打ち切った行為(=民主的な正当手順を怠った行為<sup>10</sup>)への批判主張が根底にあつての運動展開だったためである。協定承認を急ぐ馬政権の行動は「密室協議」であるとして批判が高まり、学生たちはこの政治状況を「黒箱(ブラックボックス)」と名付けて厳しく訴求したのだ(「反黒箱」)<sup>11</sup>。つまり、中台サービス貿易協定には市場を大きく変動させる潜在力があり国民の関心が高かったにも関わらず、政府(馬政権・国民党)がとった独断的な判断姿勢が学生や学生を支持した世論から問われたのである。そして政府による不透明な審議、国民に対する不十分な説明責任に対し、学生側は民主主義の危機を感じ取ったというわけである(図 1)。

### 3. 台湾の立法院周辺から見えたもの

では、運動を支持した人々はどのようにこの運動へ参加し、自分たちの抱える主張を他者

---

るとも喧伝されていた。しかし、中台間交渉に際して開放対象の台湾側業種に対する政府からの打診がなく、野党のみならず産業界に支持基盤を持つ国民党議員からも「密室協議」として批判を受けていた。そして与野党間でうまく協調が取れず審議が難航していたため、業を煮やした馬政権側が党所属議員を動かし時間切れを理由に審議を打ち切ったことが事の発端である(本田 2014 より一部抜粋)。

<sup>5</sup> もしくは占拠開始の日に因んだ「318 学運」とも呼ばれる。

<sup>6</sup> Facebook や YouTube に更新される運動の主張や様子は、筆者が知っているだけでも多くて 31 か国語に翻訳され国際社会に向けたメッセージとして発信されていた。

<sup>7</sup> 3月30日には総統府付近で公称 50 万人規模(警察統計は 12 万人弱)のデモが行われたほどである。日本でも台湾からの留学生による呼びかけで「330 青空教室」と称した集会が開かれ、冷たい雨が降るなか、東京では代々木公園に多くの人が集まった。呼びかけには主に SNS が活用された。URL より詳細の閲覧が可能(<https://www.facebook.com/events/1478804075680882/> 2014年11月10日アクセス確認)。

<sup>8</sup> 本田(2014:244)

<sup>9</sup> 但し、立法院周辺で抗議活動をする人々の中には「反服貿」を主張する意見も見られる。

<sup>10</sup> 民主主義の原則である正当な選挙をもってして選ばれた現在の馬政権ではなく、不法に議場を占拠する学生たちの方が民主主義を侵しているのではないかとの批判もなかには存在した。しかし国民が不信を抱く政治プロセスに対して「密室協議/黒箱」だとして異議申し立てを行うことは正当な政治要求であると感じさせられるとともに、民主政権下において「主権者」は為政者ではなく国民であることを改めて突き付けられたようにも感じさせられる。

<sup>11</sup> 立法院周辺で繰り広げられた議論の場では、「反服貿」意見や「反黒箱」意見、その他の見解などが様々に入り混じってはいたものの、運動を発起した学生集団のそもそもの主張は「反黒箱」であるため本稿で扱うヒマワリ学生運動でも「反黒箱」意見を中心に取り上げる。

と共有したのであろうか。ヒマワリ学生運動は議場占拠から始まったため、議場内における学生の働きかけ(泊まり込みや情報発信、演説、交渉など)が報道などで取り上げられて注目を浴びた。しかし本稿では、実際に現地を訪れて印象的だった立法院の周囲の様子に着目してみたい。立法院周辺には運動を支持する人々が集まり、立法院内部で泊まり込みを続ける学生を守るかのように周囲の道路で座り込みや泊まり込みを行っていた。道路封鎖された立法院の周囲には、沢山の市民がその場に座り込んでいる。立法院周辺そのものが集会の場となり、代わる代わる演説が繰り返されるとともに、あちらこちらで互いに意見を交わす様子が窺える(図 2)。その場がすでに市民の政治参加の空間となっているのである。つまり民主主義の土台となり得る姿である。またそれと同時に、立法院周辺の壁が夥しい量のポスターやチラシで埋め尽くされているのが目に入る(図 3)。抗議文章や風刺画、嘲笑画、ヒマワリなど壁は様々な絵と文字で溢れ、通り行く人も一つひとつに見入っている様子であった(図 4)。これら創作物には様々な工夫や表現が凝らされ、観る者に訴えかける。その中でも“*We are watching you*”や“*Government, I’m watching you*”といった文字が添えられたポスターや、眼が描かれたポスター、横断幕が一際目立った(図 5、6、7、8、9)。これらから連想されるのは『1984年』の世界観から現状を皮肉った訴えではないだろうか<sup>12</sup>。今回の運動で街に貼られたポスターの中では、“*Watch*”する主体が政府ではなく“*T*”や“*We*”といった市民の側にあり、逆に“*Watch*”される主体となるのが政府の側として暗示させられている。また文字化していなくとも、いたるところで「眼」を意識したポスターや横断幕などのペイントが見かけられ、真っすぐと見据えるようなたくさんの「眼」たちに目を奪われるとともに、見張られているかのような感覚に襲われるのである。またその他にも、話し合いを行なう少数者と取り残された多数者の姿が描かれた作品や(図 10)、ヒトラーを連想させる独裁者のポスターに馬總統を見たてた作品(図 11)、ブラックボックスを意識させる作品(図 12)などは特に象徴的な現況の政治批判である。これらの作品群は草の根の群衆が生み出したからこそ国民の声を表しているとも感じられる<sup>13</sup>。

#### 4. 芸術が持つ可能性

ヒマワリ学生運動の本質が「密室協議」を進める政府の「黒箱」状態に対する告発だったとするならば、「私たちは見張っているぞ」との主張が込められたかのようなチラシやポスターを見かけるのは自然なことであろう。またどの作品も、この運動における、この状況下でしか創られなかったであろうもので、それぞれが権力に対する意思を持っている。「差別や抑圧に抵抗する運動のなかにこそ、文化が、動的で創造的な文化が存在する<sup>14</sup>」ように、将来的に自らの生活へと密接に影響することが確実な中台サービス貿易協定において不透明な

<sup>12</sup> 英国人作家ジョージ・オーウェルは『1984年(*Nineteen Eighty-Four*)』というディストピア小説の中で全体主義的近未来を描いた。作中に“*BIG BROTHER IS WATCHING YOU*”という言葉が登場している通り、人びとは監視社会に置かれて生活する。

<sup>13</sup> 有名なアーティストが描いたものではないこれらの作品群も、個々人の主張や感性を象った創作物として存在するため、立派な芸術作品と言えるのではないだろうか。

<sup>14</sup> 本橋(1999:9)

政治が行なわれたことへ異議を唱えようとする一部の台湾市民が、それぞれに自分の気持ちや意思を表現する手段の一つとして創作活動という手段を用いたのである。そして作品が公共の場で公開されることで、作品を観る者(他者)に、作品の背景を問い続けることとなった。そこでは想像力や思考力が試され、作品を創る者にとってだけでなく、見る者にも政治を問わざるを得ない状況が生み出された。芸術<sup>15</sup>を一括りにして語ることはできないが、上述してきたことから窺えるのは芸術の可能性とも言えるのではないだろうか。立法院周辺に貼られた無数の作品は、自己表現であるとともに、あの空間に共有されることによって多くの人の目に晒された。そのことを通して、現状や政治を訴えかけるために創られた作品は、観た人の思考力を働かせることにも寄与している。つまり、創作物によって市民の政治参画を促すことにも繋がっていると考えられるのではないだろうか。

## 結論

台湾における運動から改めて気づかされるのは、政治に参加する主体は政治家だけではなく、市民が参加するものであるという、民主主義において「必須」の事実である。ヒマワリ学生運動における立法院周辺の様子からは、作品を創造する作業や作品を媒介にして想像力が試されるなかで、特に民主主義や政府の在り方が問われ、より多くの市民をこの政治の問いに巻き込もうとしている。そこでは人々が自己を表現するための手段や政治に訴えかけるための思考力を促すかのような「芸術」が見出せる。また元々在った小説などの芸術作品がインスピレーションを与えることで、現状を批判的に考えさせる効力を発揮する様子も見受けられる。平和をつくるため共有されるべき価値観を喚起させる力を芸術が持っている様子が台湾の学生運動を通して垣間見えるのではないだろうか。

---

<sup>15</sup> 広辞苑では「【芸術】一定の材料・技巧・様式などによる美の創作・表現。造形美術(彫刻・絵画・建築など)、表情美術(舞踏・演劇など)、音響芸術(音楽)、言語美術(詩・小説・戯曲など)、また時間芸術と空間芸術などに分けることもある」として記述されている。従って表現の美術方法としては、造形、表情、音響、言語に4分類できると言えるだろう。

人間の内側から出てくる創造力は音楽や詩、小説、絵画などの芸術作品として社会に生み落とされる。しかしこれらの作品は必ずしも美的・娯乐的価値のみを持つものではない。芸術活動を通して、時に権力に抵抗を試み、時に人々の連帯を生み出すことができるからである。

尚、ヒマワリ学生運動の応援歌として、台湾の有名バンド「滅火器」が『島嶼天光』という曲を作り(<https://www.youtube.com/watch?v=iV8JDbtXZm4&feature=youtu.be> 2014年11月10日アクセス確認)、運動中にはよく歌われていた。また、ヒマワリ学生運動をきっかけに「絶対不純粋東亜論壇：報民/AABB・台南/東京交流計画」が組織された。日本、韓国、香港と台湾の芸術家、評論家、社会運動の推進関係者、展覧主催関係者が集まって、新自由主義下における民主政治、自由貿易、土地の商品化、ジェントリフィケーション、東亜問題、そしてデモの中などに存在する芸術形式をテーマにした交流が生まれている(資料より一部抜粋)。この動きは芸術活動を通じた人々の連帯とも言えるだろう。

■ 図表

※写真撮影はすべて筆者(2014年4月1日-4日、台北市)

図 1



図 2



図 3



図 4



図 5



図 6.





图 7



图 8



图 9



图 10



图 11



图 12



## ■参考文献

佐々木毅『民主主義という不思議な仕組み』ちくまプリマー新書、2007年.

ジョージ・オーウェル(著)・高橋和久(訳)『一九八四年(新訳版)』早川書房、2009年.

本田善彦「台湾『ヒマワリ学生運動』の残照」『世界』第857巻、岩波書店、2014年.

本橋哲也「文化研究とトランスナショナルライゼーション」『立教アメリカン・スタディーズ』第21巻、7-27頁、1999年.

ヨハン・ガルトゥング『構造的暴力と平和』中央大学出版部、1991年.

資料『絶対不純粋東亜論壇：報民/AABB-台南/東京交流計画 (*POST News/ Art Against Black Box-Tainan/ Tokyo Exchange Project*)』

## 【参加した講演会】

- 1) 日本台湾学会第16回学術大会プログラム シンポジウム「中台関係の新展開と社会変動」(『太陽花学生運動』への道—台湾市民社会の中国要因に対する抵抗 報告：呉介民)、2014年5月24日開催.
- 2) トークイベント「太陽花運動：イメージと連結の力」、出演者：港千尋、龔卓軍など、主催：Photo Gallery Place M(東京)、2014年7月19日開催.